

令和 7 年 6 月 29 日現在

機関番号：47124

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K00697

研究課題名（和文）アートが演出する環境による幼児・児童の外国語学習のヘッドスタートの研究

研究課題名（英文）A Study of Creating an Artistic Environment to Help Children get a Head Start of Studying English.

研究代表者

樋口 和美 (Higuchi, Kazumi)

福岡女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：90866493

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：国内、海外の小学校や幼稚園の教育現場におけるアート企画および交流授業を通じて、製作や鑑賞の体験を共有する中で、言葉の壁を越えて互いを理解しようとする心情の動きを確認できた。分担者松久は、実践において英語環境の子ども園の英語カリキュラムに対して、色や形が流動的に変化する造形活動の中で、感動や感情に即した英語の必要性を感じながら伝え合う楽しさや伝わる喜びにつながる場面を多く見だしている。このようにアートの活動や環境を介した交流や活動が実現することで、他者理解や関心が深まり、相互への興味が喚起されると同時に言語によるコミュニケーションや言語理解への効果的な動機づけが形成されることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感動や感情を互いに伝え合おうとする動機は、英語学習を自発的かつ主体的なものとする上で重要である。特に幼児教育の現場では、美しく多様な環境やアート活動の機会を通じて、新たな言語や音声に対する関心が自然に生まれ、幼児が喜びをもって英語を体得する姿が多く観察された。グローバル化が進む我が国においては、日本文化の美的価値とその発信力を備えた次世代人材の育成が急務である。アートと外国語教育の融合は、幼児期から初等教育期に至る一貫した教育連携のスタートアップに資するとともに、国内外の研究機関や教育現場との協働により、多様な文化背景に基づく教材開発と教育方法論の体系化が進展し、教育全体への貢献が期待される。

研究成果の概要（英文）：Through art planning and exchange classes at elementary schools and kindergartens in Japan and abroad, we were able to confirm the movement of feelings to understand each other beyond the language barrier while sharing the experience of making and appreciating art. In practice, Matsuhisa, a member of the research team, has found many situations in which creative activities, where colors and shapes change fluidly, lead to the joy of communicating and the need for English that reflects emotions and feelings, in the English curriculum of an English-speaking kindergarten. In this way, it became clear that exchanges and activities through art activities and environments deepen understanding and interest in others, arouse mutual interest, and at the same time effectively motivate people to communicate and understand language.

研究分野：造形表現 美術教育

キーワード：アート環境 造形表現 外国語 美術教育 コミュニケーション 保幼小接続 スタートアップ

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

小学校高学年における外国語活動、中学年から外国語活動の完全実施及び高学年では教科としての英語教育が本格化となった。社会が学校に求める期待は高く、保護者の教育的関心も一層高まり、幼児期より英語塾などに通う家庭も少なくない。一方、英語活動のない幼稚園・保育園に通う児童や、家庭内の保護者の関心が高くない環境では、英語にふれる機会が著しく限定され、実質的に「経験格差」が生じている。英語教育が必要とされればされるほど教育環境による不平等が浮き彫りになってきているといえよう。こうした背景を踏まえると、幼児期から小学校への移行期における経験の継続性や、その動機づけに効果的な実証的研究が強く求められる。

2. 研究の目的

本研究は外国語活動の円滑なスタートをはじめ、学習者の経験不足からくる不安によるレディネスの低下を感性に係るアートのアプローチにより緩和して、新しい学びの期待形成を促していくことを目的とする研究である。北米の ENL 教育やオーストラリアにおける IEC 教育 (インダストリアル・イングリッシュ・センター) 等の教育の事例から考察しその理論を先行研究として参考にして日本の教育の現状に合わせた形で実施する。またイタリアのレッジョ・エミリアの理念を源とする造形的手法から有効な内容を抽出し、アート環境を設定する。学習者の観察とその変容を記録し、その効果を考察することで各地域や園の子どもの実態に即した手法を構築することを目標とする。

2. 研究の方法

1. 背景と目的の明確化：研究スタート時のコロナ禍による対面訪問制限を踏まえ、オンラインによる取材と文献調査を中心に進める。
研究分担者や協力者らとの協力体制の構築：研究協力校とのオンライン会議を設定し、郵送・宅配による教材の提供及び試行実践の協力を依頼する。レッジョ・エミリア・アプローチに基づく活動を行う教育機関の実践者にオンライン会議によるアート×英語の協働についてのヒアリングを実施し、助言と資料提供を受ける。
2. 研究協力者との調整会議を定期的に行い実践内容を共有：小学校における実践と検証を行う。その成果や結果をふまえて幼児期への展開を計画・準備をする。
3. コロナ禍の収束後の先進事例の調査：レッジョ・エミリアの教育現場をはじめ、米国 ESL 教育機関、オーストラリアのヴィクトリア州の集中英語教育制度など「母語以外の言語学習における先進事例の実践」を現地訪問及び調査をする。現地では教材や教科書などの資料を収集するとともに本研究を紹介し教育者らに意見を求め内容を検討する。
4. 新たなアート×英語連携プログラムを設計：小学校低・中・高学年だけでなく、幼児期・社会教育機関への展開も視野に入れて検証。協力校や協力園にアートの環境デザインを提案する。
5. 研究成果の公開：国内外の研究大会で研究実践の成果を発表し、論文化を進める。分担者である松久は、English スクールでの3年間の実践から、アートによる生きた英語習得と学習動機づけへの効果をまとめる。

4. 研究成果

(1) 先進国への調査(教材等の資料収集や実践内容調査、本研究への助言・検討)を行い、その歴史と変遷、内在する課題と魅力ある特色についてまとめた。
①アメリカの ENL 教育現場訪問取材を行い、言語に不安をもつ子どもたちへのアート支援と環境整備についてニューヨーク州の小学校3校と幼児部1園への調査を行い、経験の格差による支援の在り方について、また、英語学習のスタート時における学習者への効果的な環境や配慮、およびアプローチの手立てについて取材をした。また制度として確立されたアメリカの ENL 教育の支援と学習環境への配慮の在り方をニューヨーク市内の2つの大学機関と教育委員会において取材を行い、その歴史や変遷について考察しまとめた。またコロンビア大学ティーチャーズカレッジにおいて世界中の ENL 教育者らの研修協議会に招待を受け意見交換を行った。これらの成果は本研究代表者の所属する研究紀要にまとめた。その論文は英語学論説資料第56号に招

待を受けて再掲された。

②オーストラリアのヴィクトリア州の教育制度についての調査し、言語のもつ歴史的文化的背景とアートとの融合について取材を行った。オーストラリアにおける英語を集中的に学ぶ IEC 教育の実際やその歴史から言語教育に欠かせない言葉の背景にある文化や生活との関わりを学習者にどのようにアプローチを行うかに焦点をあて、その歴史と重点的な学習方法について調査した。オーストラリアにおける言語教育実践は学習者のアイデンティティーを支える言葉の背景に重きが置かれる故に言語に対する意識は学習教材研究の上で大いに学ぶべきところがあった。取材先はヴィクトリア州教育委員会、大学機関、州立小学校幼児部であった。これらの調査報告を本研究代表者の所属する研究紀要にまとめた。またそれぞれの機関との研究協力を今後も継続することとなった。

③イタリアのレッジョ・エミリア市の調査と取材を行い、分担者らと共に公立小学校において教育環境の視察と授業参観、全教員らとの意見交換を行った。また分担者松久が継続している福岡県とレッジョ・エミリア市の両方の都市で開催している子どもたちの絵画展の展示に携わり、レッジョ・エミリアの教職員らと展示スペースを創り上げていく中で言語とアートの効果的な空間演出について展示作業を通して体感した。このことを展示に携わった関係者らに許可を得て、所属する研究会で概要をまとめ口頭発表した。

(2) 教育現場における授業開発と教育の場のアート環境の構築。資料や先行事例をもとに教師らとの複数回にわたる協議のもとにカリキュラムに即した授業提案と実施に向けての準備を行い。実践に移し成果を得た。

①子どもの発達と嗜好を考慮したアート素材選定による英語活動へのスタートアップ企画の実施（小学校低学年）

子どもの学習のレディネスを高めるための環境の効果について、生活の中に仕組むことや作品を作ること・鑑賞することで、自分たちの第一言語以外の言葉に対する経験値を上げる事はもとより、新しい学びに対する関心や意識が増している効果が生まれた。アルファベットのバルーンの出現という本事例からは目にしたアルファベットやその並び、またはその意味についても考えていくという子どもたちの一連の流れを確認した。また、アルファベットの文字に初めての出会った児童においては、教育の場である教室での出会いや信頼するクラス担任の下での出会いという今後学びのスタートにおいて言語との貴重な経験値となった。英語活動について不安を感じている一部の子どもについても美しい素材との出会いや遊びが興味を持続する手立てとなることが確認された。

②「中学校英語」へのスタートアップ企画 アーツ・インテグレーション環境のもたらす効果について確認できた（小学校高学年）

卒業を目前にした第 6 学年における実践。これまでの学びの振り返りと中学校から始まる「英語」へのヘッド・スタートとして教室や授業全体をアート作品やアート思考との出会いやアーティストとの協働の空間として演出した。クラス担任や製作スタッフら英語環境で授業をプロデュースした。外国語学習のアートによる支援の結果についても子どもたちの動きや言葉、製作時の様子、アンケートなどにより考察し成果をまとめることができた。

③海外の小中学生との絵画の鑑賞交流から言葉での交流に向かう外国語活動への動機づけ（小学校中学年）

日本とアメリカ、日本とイタリアにおいて絵画を通して鑑賞交流を行った。同年代の子どもたちの絵画の鑑賞交流に意図的に英語による主題を仕組み総合的に思考することにより、海外にいる相手をより近くに意識する事につながった。ニューヨーク州公立小学校の ENL 教諭による学習シートの開発や、日本と同じように英語を第 2 言語とするイタリアの小学校の英語教師による協力により、本実践の効果の比較と双方の分析を行うことができた。

④幼稚園の英語活動の場にアート素材やアート活動のルーティンを促す設定を提案する（幼稚園年長クラス）

アーティスト活動を行う幼稚園の英語教諭と協働で教室にアート活動や英語表現によい演出となる素材を提案し、継続実践することで幼児たちの様子からその効果を確認できた。また素材配置する時の工夫や教育的意図をふまえた見せ方や提示するタイミングなどからアートの演出の更なる可能性を見出すことができた。

(3) 研究成果まとめ

①言語習得と動機づけの向上

アート環境を導入することで、学習者の言語運用能力が効果的に促進され、自己主導的な学習意欲と内発的動機づけが高まる傾向が確認された。特に、アート活動が学習者の緊張や不安を軽減し、学習への心理的抵抗を低減する支援的機能を果たすことが観察された。

②表現支援と社会的相互作用の促進 アート活動は児童の言語的表現を拡張し、創造的かつ協働的な学びを誘発する機会を提供する。集団における製作や作品の共有は、自己理解と社会的絆を深め、情動面での支援的環境を形成することが確認された。

③無限に展開可能な教育パターンとルーティン構築

アートには多様な技術、素材、形式、行動及び動作が存在し、その組み合わせは無限に近い

パターンを生む。これにより、教室や学習環境においてアート導入のバリエーションを豊富に構成でき、言語学習ルーティンとして定着させる土台が形成される可能性が示された。

以上のように、これらの成果は、「アートは学びを支援するだけでなく、学習の駆動力となり得る」という理論的立脚点を示すものであり、外国語教育におけるアート活用の有用性を実証する学術的根拠として価値があるといえる。今後もこの研究成果を発信していくことで、普及に努め、また移り行く多様化した社会の価値に即応したアートを基盤とした教育の環境を構築し提案していきたいと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 樋口和美	4. 巻 89
2. 論文標題 アート環境の演出による英語の学びの一考察 - 現代美術作家と作るアート・シーン（空間・人・物・場）-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 福岡女子短大紀要	6. 最初と最後の頁 77-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樋口和美	4. 巻 88
2. 論文標題 アートを基礎とした英語の学びと環境の一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口和美	4. 巻 第87号
2. 論文標題 子どもの学びのスタートを支える環境づくり - 異文化交流・外国語活動のヘッドスタートの研究 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口和美	4. 巻 90
2. 論文標題 オーストラリアのIEC教育プログラムにおける実際	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 福岡女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 89-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 樋口和美
2. 発表標題 レゾジョ・エミリア市のアートに基づく教育環境について
3. 学会等名 日本美術教育連合
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋口和美
2. 発表標題 アートが演出する環境による外国語学習のスタートアップの研究（ ）
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口和美
2. 発表標題 幼児の環境に関わる素材の研究 - 言葉を引き出す手立てとして -
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 樋口和美
2. 発表標題 Play and Language that begin with Materials in Children's Environments (査読あり)
3. 学会等名 76th OMEP WORLD ASSEMBLY AND CONFERENCE, Bangkok, Thailand
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 樋口和美
2. 発表標題 Experiencing local material activities for children with an ecological consciousness in Kyusyu Island-Collaborative activities with a nursery school in Fukuoka City- (査読あり)
3. 学会等名 77th OMEP WORLD ASSEMBLY AND CONFERENCE, Bologna, Italy
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	松久 公嗣 (Matsuhisa Koji) (00380379)	福岡教育大学・教育学部・教授 (17101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	グレートネック E.M.ベーカー エレメンタリースクール	グレートネック レイクビルエ レメンタリースクール	
オーストラリア	グレン エデュケーション コー ルフィールド プライマリー キンダーガーデン		